

## テレビ番組で語るマードック

小林 信行

1977年10月、数多くの哲学解説書の著者としてよく知られたブライアン・マギーのテレビ番組にマードックは出演している。「文学と哲学」と題された二人の対話は、番組中でも言及されているように『火と太陽』が出版された直後のことである。翌年マギーによって編集出版された『思想家たち』(Men of Ideas)で活字化されたが(これはのちの別版では『哲学を語る (Talking Philosophy)』と改題されたようである)、いまではピーター・コンラディ編『実存主義者と神秘主義者』(1997)というマードックの哲学・文学論集にも採録されている。

二人の対話は、文学と哲学の相違点と共通点、哲学的な文学、文学における哲学、作家と言語使用、といったテーマで展開されているが、マギーは文学と哲学というマードックの二つの活動領域における彼女の同一性を探ろうとし、マードックの方は文学と哲学の言語活動を対比的に素描しながらも、自らの位置は明言しないところに対話の興味深い点を見出すことができる。ひとりの人間がいくつかの活動領域をもつとき、その人のもつ多様な側面に驚くこともあるし、あるいは人間のもつ多様な可能性に驚くこともある。しかしもちろん、趣味程度のレベルであれば、人がどれほどの領域でどのような活動をしようとするかの関心をひくものではないだろうし、せいぜい多趣味の

人と言われるだけだろう。また、すぐれたスポーツ選手がすぐれた画家であるとか、すぐれた建築家がすぐれた音楽家であるといった場合も、珍しいことだとは思われてもさほどの問題意識は生じないだろう。ところがすぐれた小説家がすぐれた哲学者であるという場合、そこには異なる事情があるというマギーの認識が、マードックの二重の言語活動に目を向けさせていると言えよう。

マギーの問題提起は文学と哲学の分析しがたい重層性にあると考えることができるが、その点を理解するためには「哲学と創作(文学)の伝統的な不仲」というプラトンの申し立てを思い出す必要があるだろう。つまり、古代から相容れないとされてきた二つの領域にわたってマードックが活動していることが違和感をもたらしているのである。ところがマードックの哲学史によれば、哲学はプラトンの時代に文学から自らを切り離し、そして十七～十八世紀には科学から、二十世紀には心理学から自らを切り離してきた、とされる。つまり、文学と哲学の学問上の区別ははるか昔に決着がついた問題であることになる。なるほど現代では両者の相違は歴然としていると思われるものの、他方では相変わらず哲学を広義の文学の一部門であるかのように考えている人たちがいることも確かであろう。哲学者といえども、自分たちの世界を一個人の立場から随筆や小説でも書くよ

うに語っていると考えられるからである。

もちろん、マードックも彼女一流の表現で文学と哲学の共通性を認めてはいる。すなわち、文学も哲学も真理を探求し、それを開示しようとするものであり、ともにその認知的な活動であり説明なのだというのである。このような語り方は、文学的評価の高いプラトンのいくつかの著作、あるいはサルトルの哲学小説『嘔吐』といった事例を想起させるかもしれない。しかし、すべての文学がいつも真理探求的な形をとるべきだなどと彼女が主張しているわけではない。むしろ彼女の論点は、真理探求的で認知的な言語活動様式の違いを見ることにある。哲学は抽象的で、論証的で、率直であろうとし、科学に近い言語活動となるのに対して、文学は意図的に曖昧なままにとどまるとされる。というのも、文学的想像力が創り出すものは、感覚的で、融合的で、具体的で、神秘的で、多義的な個物だからである。しかも、哲学が極力抑制しようとしている（悪しき意味での）個人的幻想が作家の心の中では大きな勢力として渦巻いており、真理探求的な善き芸術や善き文学の成立を阻んでいるという事情もある。結局、文学もふくめた芸術は、一方では洞察的知性を持った真に独創性のある想像力を抛り所としながらも、他方で危険きわまりない無意識的な力との遊戯を繰り返していることになる。

したがって、はたしてあなた自身も『嘔吐』のような哲学小説を書きたいのかと問われれば、マードックは笑って否定するだろう。たとえ文学と哲学がともに真理探求的であっても、両者の合

致や一致は必然性をもたず、偶然的なものにすぎないからである。実際、そのことを意図的に実践しようとしても、マルクス主義のような稚拙な帰結は眼に見えている。またディケンズやトルストイの作品に社会哲学や歴史哲学の要素があるにしても、その総量が微々たるものにすぎないことも事実であり、それらの要素が作品の価値に大きな影響を及ぼしているわけでもない。結局、自分自身もふくめて小説家はただ小説家としての仕事をするだけだとマードックは言うだろう。つまり、「思索は詩人の仕事ではない、ダンテもシェイクスピアもそんなことはできなかった」(T.S. エリオット)というわけである。

すると、マードックにとって文学と哲学は「たまたま、ほんのわずかだけ」重層的となる、と言うことができそうである。しかしそうだとしても、そこに彼女自身の分裂が残るわけではない。哲学的著述の場合にはほとんど科学者のようにきわめて非利己的な「自己」の立場に立ち、他方文学的著述の場合でも、善き芸術作品を創作しようとする者としては、利己的な幻想と格闘しなければならず、安易な形で自我や個性と妥協してしまうことを拒否しなければならない。要するに彼女は真理探求空間に身を置こうとしているだけであり、真理探求者としての同一性を保っている。

もしその辺りにマードック小説の魅力の一端もあるとすれば、是非とも哲学的真理とか文学的真理に関する議論を聞きたくなるのだが、マギーのその誘いを彼女はここでは慎重に回避している。